



河野裕子 琵琶湖

随想

昏き器

私は熊本生れである。三歳の頃に離郷し、三年生の時に十日ほど帰ったことがあるが、それ以来一度も生地に帰ったことはない。それなのに、なぜか意識の暗く深い所では、熊本の七滝村の何かが蠢蠢いているのを感じる。それは、暗い情念のような妙な何かなのだが、うまく表現することができない。熊本は、『日本書紀』の昔から、『火の国』と呼ばれた地である。この火の国という呼称を意識するようになったのは、おそらく、

たつぷりと真水を抱きてしづもれる昏くらき器
を近江と言へり

という歌を作り、この歌がいつからか私の代表歌として遇されるようになってからだろうと思う。水の国近江おうみと対置するものとして、生地熊本の、火の国を思い起したのには自然ななりゆきというものだろう。

滋賀県には五歳の時から二十五歳まで暮らし、結婚後何年かたつてから、再び数年住んでいた。実家は滋賀県にある。近江の風土とは五十年ちかく関わって来たことになる。生れ故郷には三年しか住まなかったのに、妙に暗く私の意



識を支配するものがあるのだが、近江の風土への私の意識は、ずっと穏やかである。

昏き器の歌は、結婚して東京で暮らしていた頃のものである。二十九歳の頃だったと思う。乾いた東京で暮らしていて、私はしみじみと琵琶湖を抱いている近江という暗くしつとりとした風土をなつかしんでいた。それは、離れてみて初めて見えて来た風土であった。

琵琶湖というたつぷりとした水源を持つ近江の空は、真夏でさえどこか暗い透明感をたたえて、しんと静かな趣がある。また琵琶湖は、四季を問わず、一日の時間帯を問わず、いつでもいい。いつ見ても見あきるといふことがない。晴れた日も、やはりどこかが何かがしんと暗く静かなのが琵琶湖である。風土として、景として琵琶湖は私の身体にしみついてしまったようなところがある。生地が生みの親であるとするなら、琵琶湖は近江は、落ちついた表情でいつでも迎え入れてくれるたつぷりとした養い親である。